

配合飼料100%の リキッドフィーディングで 授乳による母豚の損耗を防ぐ

DATA 事業規模
所在地：東北地方
飼養頭数：1,200頭（母豚）
飼養形態：繁殖農場
従業員数：11名

養豚の繁殖成績で重視されるのは、1母豚当たりの年間離乳頭数だ。中でも、授乳期の母豚の飼料摂取量は重要なポイントである。今回は、この飼料摂取量を上げるために、肥育豚で普及しつつあるリキッドフィーディングシステムを分娩豚舎で導入している事例を紹介する。

授乳母豚用

リキッドフィーディングシステム

同農場は、立ち上げからまだ1年半と若い。繁殖専門農場であり、肥育農場は離れた場所に2カ所ある。農場を立ち上げるにあたり、国内ではまだ成功事例がなかった授乳母豚用にリキッドフィーディングシステムを導入した（海外では事例がある）。海外の事例を参考に、「水と配合飼料の混合比率」、「1日の総給与量」、「1回の給与量」、「1日の給与回数」などの課題を1年かけて克服し、

今では1腹当たりの離乳頭数が10・42頭（PICSデータより）となっている。なお、子豚と肥育豚は通常の配合飼料を給与している。

効率的な

授乳期リキッドの設定

一般的にリキッド飼料では、飼料1に対して水は3・2〜3・5と言われている。給餌器の内側（母豚側）は飼料が溜まりやすいので、混合比を1・4とすることでリキッド飼料が付着しないことを見出した。

1日の総給与量は、母豚のボディ

コン・飼料残・産歴により細かく調整しているが、夏場で7・0kg以上の飼料を摂取させることができた。給与回数は、早朝から夕方までの間で5回に設定している。現時点では、これが最も効率よく母豚に飼料を摂取させる方法だとしているが、まだまだ今後改良の余地があると、担当者は話す。当面の悩みは、大きくなった哺乳子豚がリキッド飼料に手を出して下痢をすることである。

震災のダメージを

リキッド給与で回復

3月11日に発生した東日本大震災により飼料の供給が1週間ほどストップし、全ステージで極限ともいえる制限給与を行った。その結果、母豚は全体的に痩せ細り、離乳母豚は

肋骨が浮き出るほどになった（ボディコンディションで1・0）。震災で育成豚の導入ができず母豚更新が進まなかったこともあり、再帰発情日数は10日以上となった。発情した母豚の種付は行ったが、痩せ細ったままなので離乳後にはほとんどが廃用出荷になると懸念された。

しかし、半年以上経過した現在では飼料の供給も復旧。ほとんどの母豚が震災前の体型まで回復している。授乳期リキッド給与の最大の利点は飼料摂取量の増加であるが、今回のケースもこれによって授乳時の体重損失を最低限に抑えられたことによるものと推察している。さらに、哺乳子豚の21日齢時体重も7kg弱と大きくできていたのも、リキッドの効果であると考えている。

リキッドフィーディングシステムの導入



写真1：リキッド飼料をつくる各種タンク

Point!

飼料の混合比を1：4とすることで、リキッド飼料の不着を防ぐ

リキッドフィーディングシステムとは？

液体飼料給与システム。コンピューターで制御され、よりきめ細やかな給餌が可能。豚の消化吸収率が上がり、飼料コストが減るほか、子豚の発育がよくなり増体重につながる効果があるとされている。



写真2：給餌量や時間などは1台のPCで管理



写真4：給餌器に流れ落ちるリキッド飼料



写真3：分娩舍内に設置されたリキッド給餌ライン



写真5：リキッド飼料を食べ切り給餌器を舐める母豚

表：PICSデータによる繁殖成績の推移

項目	単位	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月
再帰日数	日	9.10	10.13	10.81	9.23	5.42	5.11	4.95
分娩回数	回	2.26	2.09	2.56	2.55	2.06	2.83	2.63
正常産子数	頭	10.91	11.22	11.04	11.30	11.07	12.05	11.82
離乳頭数	頭	9.05	9.38	9.12	9.61	9.76	10.06	10.42
21日齢時体重	kg	6.12	5.92	6.33	6.71	7.01	6.96	6.84

Point!

3月の震災以降、一時的に成績が低下したが、現在は回復した